

すが、向井（敏明）少尉はあの記事で再婚できたし、野田少尉も有名になれた」

最初述べたように鈴木氏が虐殺論争に巻き込まれたのは戦後しばらくして、毎日新聞の子会社の重役として札幌に行っている時である。自分の書いたものが話題になっていると社員から聞かされ、また『週刊新潮』から電話取材があった。鈴木氏の知らないところで論争が起きていた。

「自分の書いたことが嘘と言われたことには腹が立ちました。毎日新聞で飯を食った者としてがまんができませんでした。でも、その時、反論しようにもその場がなかった。

毎日新聞の名譽終身記者なので、社報にそういうことは書きました」

以上が二時間あまりのインタビューの内容であった。

帰る段になり、鈴木氏は中山門上、勵志社の入口、場所が不明だが伍長が中国兵を殺した現場で、いわゆる虐殺を見た、虐殺の跡らしいのは下関、光華門らしき場所の散兵壕で見た、人数は下関の千人以上、光華門らしき場所でも多数、それ以外ははっきりしないが数人程度である、南京全体でどのくらい虐殺があったのかは知らない、以上が今日うかがった話の主な内容ですね、と念を押すと、その通りですとおっしゃった。

三、読売新聞

報知新聞・二村次郎カメラマンの証言

報知新聞（現在の読売新聞）は他の新聞社と同じように支那事変勃発と共に、現地に記者、カメラマンを多数派遣した。上海には、まず五人の記者とカメラマンが派遣され、上海事変が起きると、さらに二人の記者が派遣された。百武支局長以下三人の上海支局では不十分だったからである。昭和十二年九月五日には第三陣が派遣された。それがカメラマンの二村次郎氏であった。

二村氏は十六歳で報知新聞に入社し、ボン焚き屋（フラッシュマン）から始まって、その時はまだ二十二歳のカメラマンであった。写真部の中では最も若かった。同じ頃、スベイン戦争を撮っていたロバート・キャバの例をあげるまでもなく、従軍はカメラマンとして最高の舞台である。それだけに二村氏の派遣に写真部の中では羨望する人もいた。

閘北、大場鎮、走馬塘など、上海の戦いの主なものはほとんど従軍した。十一月十一日になり上海は制圧され、日本軍が南京に向けて動き始めると、今度はそれに従った。

二村氏は翌昭和十三年の三月末まで上海にいて東京に戻り、六月には報知新聞から東京日々新聞（現在の毎日新聞）に引き抜かれた。

戦後、毎日新聞に在籍のままカメラマンとしても多くの写真を発表し、また写真スタジオも持った。

この話は、昭和六十一年四月、ちょうど桜が満開の時に、東京・渋谷にある二村氏の写真スタジオでお聞きしたものである。二村氏は、戦災を免れた唯一のアルバムと朝日新聞の南京虐殺報道の切り抜きを手にしつつ南京の話をしてくれた。

二村氏は、南京事件についていえば、ほとんど忘れかけていたが、十数年前、『南京大虐殺のまぼろし』を書いた鈴木明氏がたずねてきて、それで南京事件が世間で話題になっていることを知った。それ以来、南京事件という文字を見ると目を止めるようになり、朝日新聞の切り抜きも、数年前の万人坑の記事を切り抜いて持っていたものである。

——上海から南京に向った時、どういうコースを行いましたか。

「最初、崑山まで鉄道線路を歩いて行きました。もちろん鉄道は通っていません。どこの部隊と一緒にということなく行きました。それから蘇州に行き、ここでは軍の入城を撮りました。蘇州は大きい町でしたので、蘇州入城の写真は至急に上海まで持って行くことになり、読売新聞も真柄（秋徳）写真部長と宮川（克巳）写真部員、東京日々新聞は鈴木二郎記者が行くことになりました。

その時、連隊長、たぶん富士井（末吉大佐）連隊長だと思いますが、『われわれは敵が寝ているうちに一気に進軍してきたが、今は敵も起きているから途中は危いぞ』と言ってわ

れわれに銃を渡してくれました。もちろん兵隊は出せませんから。銃は中国軍から鹵獲したもので、私が軽機関銃を、三人は歩兵銃を渡されました。私は射ち方も知らないのに、試しに射ってみると言われて射つと、反動で尻をつき、当るところの話じゃありません。それでも銃を持つてただけでもいいだろうというので銃をかついで崑山に向いました。荷物は何人かの苦力に持たせていきました。

崑山に着いたら報知の車が来ていたので、ここで三人とは別れて私は上海に戻りました。それまで一緒だったとはいえ、最後は競争ですから、報知の車に他社の人を乗せる訳にはいきません。他社も車なんかがあったようです」

——上海からまた出発するのですか。

「ええ。記事はちよつと遅れても取材すれば書けますが、写真はその場にいないければどうにもなりませんからね。すぐに一人で出発しました。無錫まで行って、その時の写真も上海に持っていたと思います。

その後、どこの部隊でもいいから第一線についていこうと三度上海を出発したところ、第六師団の第四十七連隊と一緒にいました。私は大分生れですが、この連隊も大分の連隊だったので、そのままこの部隊についていくことにしました」

——第四十七連隊はコレラが発生して、しばらく嘉善にとどまっていますか。

「そうでしたか、そのことは記憶にないので四十七連隊と一緒にになったのはその後でしょう。南京に行くまで四十七連隊とは一週間位一緒にいました。

最初は連隊本部と進みましたが、まもなく第一線まで行きました。第一線じゃないとい写真が撮れませんか。連隊本部は食糧があり、新聞社のものだと言うと面倒みてくれましたが、前線に行くとき食糧がなく、自分でなんとかしなきゃなりません。そのうち持っていた食糧もなくなり、とうとう最後にとっておいた梅干を食べることになりました。ところが、これが梅干ではなく梅干というお菓子でした。それからは周りにある農家に入ってあさって食べました。兵隊もそうやっていたと思います」

——他社のカメラマンとは一緒でしたか。

「途中、毎日新聞の石井（清）カメラマンと一緒にしましたが、すぐ別々になりましたからほとんど一人でした。中華門では私の近くで、福岡日々新聞の此山（国雄）カメラマンが中国兵の鉄兜をかぶっていたため、間違えられて日本兵に射たれたとも聞いています。中国兵が周りの民家にたてこもっていましたから、中国の鉄兜をかぶるのはちょっと非常識だと思いました。でも従軍戦死には変わりありません」

——城壁上に日の丸を最初に立てたのは第四十七連隊ですね。

「そうです。中華門の方の城壁をのぼって攻めました。その第一線で私も写真を撮りました。前線といっても中隊位まで行くのが精一杯でその先には行けませんから、陥落の間というのはなかなか撮れないのですよ。ですから、やらせが常套手段でしたね」

——南京城内に入ったのはいつですか。

「四十七連隊が占領した城壁をのぼって入った記憶があります。十二日かもしれませんし

十三日かもしれません」

——城内はどうでしたか？

「中国人は誰もいませんでした。四十七連隊とはそこまで、城内に入ってから一人で行動しました。報知の記者たちがバラバラに南京に向ってましたから、彼らを探しだして臨時支局をつくり、城壁占領などの写真は飛行機なんかで上海に運びました」

——臨時支局はどこに設けましたか？

「どこか記憶がありません。報知は伝書鳩の係も日本から連れていってました」

——南京虐殺ということが言われていますが……。

「南京にいる間見たことがあります。戦後、よく人から聞かれて、当時のことを思い出しますが、こういう虐殺なのか私が聞きたいぐらいです。逆に人が書いたものを見たりしています。アウシュヴィッツの様に殺す場所がある訳でもないからね。私が虐殺の話聞いたのは、戦後、東京裁判の時です。それで思い出すのは、南京に入った時、城内に大きい穴があったことです」

——いつ頃のことですか。

「南京城に入ってすぐです。長方形で、長さが二、三十メートル位ありました。深さも一メートル以上はあり、掘ったばかりの穴でした。大きい穴だったから住宅の密集地でなく、野原かそういう所だったと思います」

——日本兵が掘ったのですか、中国人が掘ったのですか。

「それは知りません。南京虐殺があったと言われていたので、その穴が関係あるのではないかと思っていましたが、本当のことは知りません」

——あとで見にいたりしませんでしたか。

「その時は別に気にも止めていなかったたので見にいたりしません。戦後、南京虐殺と言われて、思い出したくらいです」

——捕虜をやったという話がありますか……。

「数百人の捕虜が数珠つなぎになって連れていかれるのは見たことがあります。たしか昼でした」

——捕虜を見て、社で話題にしたりしませんでしたか。

「捕虜といっても、戦いの途中、捕虜の一人や二人を斬るのは見たことがあります。皆もそういうのは見ているから、特に話題になったことはありませんでした。捕虜と一言で言いますが、捕虜とて何をするかわかりませんからね。また、戦争では捕虜を連れていく訳にはいかないし、進めないし、殺すしかなかったと思います。南京で捕えた何百人の捕虜は食べさせるものがなかったから、それで殺したのかもしれない。あの時、捕虜を連れていった兵隊を捜して捕虜をどうしたのかを聞けば、南京虐殺というものがわかると思います」

——一般市民に対してはどうだったのでしょうか。

「市民をどうするというのではないでしょう」

——南京で死体は見なかったのですか。

「死体はほとんど見ませんでした。何百人の死体を見ていれば、記憶にあると思います。

多くの特派員が揚子江に無数の死体が流れているのを見た、という話は聞いたことがあります」

——それが虐殺と言われているのですか。

「虐殺されたものではなく、数が多いので話題になったのだと思います」

——南京ではどこに行ってますか。

「揚子江に行きましたが、私が見たのは一人か二人の死体でした。故物保存所にも行きました。大きい建物で内部はちらかっていました。中国兵が略奪したのか、日本兵が荒らしたのか、目ばしいものはありませんでした。

今でも写真が残っているのが中山陵に行った時のもので、報知新聞の連中何人かで行きました。百段もの石段があるところで一日がかりでした。悪い日本兵がいて、紙屑を陵の部屋に投げ込み燃やしているのがいたので、特派員一同水を汲みに行った記憶があります。

また、国民政府の建物に行つて、日の丸があがっているのも撮りました」

——入城式も慰霊祭も撮ったのですか。

「撮りました。印象的だったのが慰霊祭で、その頃、軍司令官のそばによることは大変なことでしたが、慰霊祭の時はそばまで行つて撮ることができました。その時、私は緊張で体がふるえました。

松井（石根）軍司令官は泣いて弔文を読み上げていまして、それを聞いて私も感激で涙が流れてきました。あの時の感動は今も覚えています」

——慰霊祭が終つてすぐ帰るのですか。

「数日、南京にいたのかもしれませんが。帰りは車で帰ったのですが、途中、車ごと田圃に落ちて、それでも誰も怪我もせず無事でした」

——そのまま上海ですか。

「上海に戻ってから杭州に行きました。年が明けて一月か二月頃、津浦線に行くためまた南京に行つてます」

——その頃の南京の様子はいかがですか。

「もう敗残兵もいせんし、街は静然としていました。日本兵も警備兵だけでした。

私は徐州作戦だということで津浦線のほうに行つてしばらく待ちましたが、作戦が進まなかったで、上海に戻り、東京に帰りました。東京に戻ったのは四月一日です。

今、あの頃のことを振り返ると、人間の命というのはわかりませんね。私は走馬塘の戦いの時は最前線まで行つて撮つてましたが、なんとか無事でした。しかし壕に残しておいたリュックは直撃を受けておりました。そのリュックは報道記者のリュックとして、先の軽機関銃と共に東京で一般に展示されたこともあります。

私も一緒に行つた岩倉具方（画伯、岩倉公爵家三男）さんはおとなしい人でしたから、『戦場は恐いので行きません』と上海の街を一步も出ませんでした。ところが、中国軍が日本人の住んでいる街を砲撃しましたので、安全な呉淞路にいたのに、岩倉さんは直撃を受けて亡くなりました。上海では報道関係者の最初の犠牲者だったはずで、街にいても、第一線にいても、死ぬ時は死ぬんだと思ひましたね」

報知新聞・田口利介記者の証言

昭和十二年八月十三日、上海事変が勃発した時、田口利介氏は報知新聞（現在の読売新聞）の社会部記者で、海軍省詰めであった。上海では、七千人の在留邦人を守るため、四千人の海軍陸戦隊が三万人の中国人を相手にしていた。そのため、海軍省詰めの記者クラブである黒潮会からも上海に行くことになり、同盟通信、朝日、毎日、読売、報知各社の社会部記者が一人ずつ行くことになった。この時、報知新聞の代表者が田口氏で、毎日新聞からはのちに『おはなはん』を書いた林謙一記者が行くことになった。東京駅を發つたのは九月十二日である。田口氏が二十六歳の時であった。

上海に着いた時、日本軍は公大飛行場に進出したばかりで、まもなく九月十九日から二十五日まで十一回、のべ三百機による南京空襲が行なわれた。外国から非難を浴びた南京空襲である。

——上海には海軍取材ということで行つたのですか？

「そうです。開戦後十日間、海軍陸戦隊は激戦の後、本部を死守し、私たちが上海に行つた時は北四川路で中国軍と対峙していました。」

報知新聞には従軍画家として岩倉具方画伯（前述、岩倉具視の令孫）がいましたが、十月十四日に租界を歩いて、頭に迫撃砲をうけて戦死しました。

海軍の従軍画家でもあった訳ですから、火葬にする時、私は海軍に兵隊を貸してくれと頼みに行きました。同じ海軍でも陸戦隊や報道部は人手が足りなからうと、第三艦隊に行つたところ、そういうのに貸す兵隊はいない、と断られました。従軍画家とか従軍記者といつても死んだら軍とは関係がないから冷たいものです。そこで、居留民団がつくつてくれた棺桶に入れて、中国人と運転手と二人で、朝早く飛行場近くの桑畑で石油をかけて焼いたことがあります。

——陸戦隊が戦うのは閘北さばくの戦いまでですね。

「陸戦隊が閘北をおとした時、陸軍も大場鎮をおとし、戦いの中心は陸軍の方に移つてきました。そこで、その後、私も陸軍の方を取材しました。」

上海の郊外には縦横にクリークや湖があり、中国軍はこれを利用してトーチカを築き、蒋介石はこれをフォン・ゼークト・ラインと言っていました。ドイツのフォン・ゼークト將軍がクリークを利用してマジノ・ラインに匹敵すると言われた堅固な陣地を蘇州まで造つていたので。海軍航空部隊は制空権を持つてましたが、これの一つひとつつぶすのは

容易なことではありませんでした」

——南京には陸軍部隊についていくのですか。

「上海派遣軍は崑山、蘇州という方向で攻めていきましたから、われわれも特にどの部隊ということなく、ついていきました。蘇州、無錫と進んでいる途中、第十六師団と一緒になつたので、そのまま第十六師団についていったのです。その後、常州、丹陽と行き、片桐部隊長（第九連隊）などについて、何度か記事を書いています。」

私はジープで行ったので、記事はジープで上海に持つていきましたが、南京近くになると、中国軍は橋を焼いて逃げたので、そこまでしかジープが行けず、その時の記事が最後の記事になりました」

——師団司令部と一緒に進んだのですか。

「私は中隊あたりと進んでいましたから、師団司令部にはほとんどいませんでした。ですから師団長とか参謀は知りません。」

十二月八日か九日頃、句容にいた時だったと思いますが、衆議院の慰問団数人が軍司令部に来てまして、朝香宮様にと云つて日本酒をおいていきました。その夜、宮様の軍の中佐参謀がその酒を飲めと持つてきてくれましたので、みかん箱にろうそくを立てて、灯が敵の方に漏れないようにして飲んだことがあります。苦勞していない宮様より、前線まで来ている記者に酒を飲ませてやるというのです。私は「ヤクザっぽいな」と思ったのです。が、この参謀が沖縄戦で腹を切つて死んだ長（勇中佐）参謀で、いかにも長参謀らしいです。

ね

——長参謀とはその後も一緒でしたか。

「いや、その晩だけでした。」

翌日は麒麟門だったと思いますが、ここに行きました。麒麟門といっても、南京城の城門ではありません。私のいたところは部落というより、家が五、六軒しかないような所で、前線の中隊ぐらいがいる所でした。

南京城はいくら野砲で攻撃しても崩れず、三、四日ここにいました。

あとで、上海に戻ってから知ったのですが、この頃、毎日新聞は南京城攻撃という号外を出しました。そこでうちの上海支局では、一体うちの記者たちは何をやっているんだと思っていたらしく、上海に戻った時、怒られたことがありました。実際、その時、日本軍は南京城にたどりついただけですけどね。

ここにいた時、夜中に、兵隊から『起きんと焼けまっせ』と起されましてね。眠いし、のんびりした京都弁だから一瞬わかりませんでした。しばらくしてよくみると、窓の外が真っ赤に燃えています。『焼けまっせ』ではない、これではまる焼けだ、とあわてて逃げ出したことがあります。

そうやって数日待つうちに、ある朝、起きたら突然砲撃の音がしなくなり、その日に南京が陥落しました。一夜にして別世界とはこのことです。私もその日南京に入りましたが、その時は、わずかなお米とめざし三匹しか持ってませんでした」

——中山門から入ったのですか。

「そうです。中山門の内側には土囊がぎっしり積まれてましたが、私が入った時は中山門の一部の土囊が取り除かれていましたからここから上がりました。」

城内は静かで弾の音もしませんでした。それまで相当ガンガンやってましたがねえ。

中山門から入ったところが中山東路という大きい通りで、人間はおろか猫の子一匹いないといった様子でした。

中山東路を少し行っただけで国民政府の建物がありましてね、入ってみて驚いたのは蒋介石の生活がそのまま残っていて、蒋介石がまるでそこにいる様でした。机の上には鉛筆や筆があつて、すぐ仕事ができるような状態でした。十二月七日頃、逃げたといえますから慌てて逃げたのでしょう。

それと浴室にビデがありましてね。最初、これを見て何かわからなくて、途中はたとビデだと気がつきました。ビデは名前だけは知っていましたが、実際見るのは初めてでした」

——南京城内はどうでした？

「死体は二、三体だけでした。中国軍は下関の方から逃げたと言っていましたので、一度、下関の方に行ったことがあります。下関というのは揚子江のところの波止場で、そこは一つの町です。下関の方に行くにもいくつかの門がありますから、どの門から行ったのかわかりませんが、行ってみると何もありませんでした。逃げたあとだったからかもしれませんが」

——ほかに南京で印象的なことは？

「ある日、紫金山の中山陵に詣でました。白い花崗岩でつくった幅の広い三百余段のゆるやかな階段があり、壮大なものでしたが、ここだけは一発のタマも撃ち込まれていなかった。そこで、ホッと胸を撫でおろした記憶があります」

「南京で虐殺があったと言われていますが……」

「当時聞いたこともなかったし、話題になったこともありません」

「第十六師団の軍紀はどうでした？」

「私が見た限り特にどうということはありませんでした。ただ、南京に向かう途中でしたが、第十六師団の曹長で、百人斬りをするんだと言ったのがいました。南京まで百人斬ったかどうか知りませんが、戦友の仇をとるんだといって、中国人と見ると必ず銃剣でやっていて、殺した中には兵隊じゃない便衣の者もいたと言います」

「周りの人は曹長を見てどう思っていたのでしょうか」

「誰もいいことだとは思っていないでしょう。私もそれを見て、戦争では殺すか殺されるかだと思いました。曹長は仇をとることに夢中でしたが、気の小さい人だと思います」

「さきほどの長参謀がいろいろな命令したとも言われていますが……」

「長参謀には一度会ったきりですからよくわかりません。ただ、私のような海軍記者から見ると、一般に陸軍の参謀は命令違反は平気ですね。佐藤賢了（中将）、富永恭次（中将）はその典型で、長勇もそんな一人だと思いますよ」

「南京にはいつまでいましたか」

「入城式までです。次の日の慰霊祭があったことは、あとで聞きました」

「南京事件を知ったのはいつですか」

「最近です。前田（雄二同盟通信記者）君の本なんか読んでね。あの本には下関に死体があったと書いてありましたが、私が行った時はありませんでした」

私と同じく海軍の従軍記者の岩田岩二氏が、遅れて揚子江から砲艦で南京入りしましたが、彼は、南京が近づくとも無数の死体が流れてきたと言っていました。しかしその当時は、これが大虐殺によるものかどうか、ピンときませんでした」

「南京事件は既に東京裁判で取り上げられてますが……」

「私はその頃、シベリアに抑留されていました、戻ってきたのは、最後の引揚船で、昭和二十五年でした。ですから戦後五年間のことは空白です」

でも私が日本に戻ってから南京虐殺ということは聞いたこともなく、聞くようになったのはやはりここ十年だと思えます」

自分の体験から何が南京虐殺かよくわかりませんし、虐殺が誇大に取り上げられているようで、それは陸軍ファシズムへの反対のため、あるいは中共軍の宣伝というような気がします」

以上が田口氏の話である。

昭和十五年、田口氏は海軍省に入った。

その頃、ドイツでは宣伝省のもとにPK（宣伝大隊）がつくられ、前線の兵士同様に戦

争報道の重要性が認識されていた。PKは後にアメリカ海軍もまねるが、日本では従軍記者や報道が過小評価されていた。特に樋口氏の頭には上海での岩倉画伯に対しての海軍の態度があった。そのため、樋口氏は、イタリア駐在武官から戻ってきたばかりの平出英夫大佐（海軍省普及部課長）に宣伝、謀略の重要性を説き、結局、樋口氏自身が海軍省普及部に入って手伝うことになった。

普及部に入り、新聞発表、検閲などの仕事にたずさわったが、真珠湾攻撃の特殊潜航艇の九人に軍神をたてまつったのは樋口氏である。

昭和十八年には樋口氏も徴兵になり、ハルピンに行き、特務機関の仕事についた。終戦と共にシベリア抑留になり、戻ってきたのは昭和二十五年である。

シベリアから帰国後は海上保安庁の中に海洋少年団を作って育成、十年間それをやった後、馬場金治海軍中佐（海軍省報道部）のやっていた『時の課題』をひきつぎ、現在も続けている。著述も何冊もあり、『戦う海軍魂』『海軍作戦史』などがある。

読売新聞・樋口哲雄撮影技師の証言

樋口哲雄氏はもともと日活の映画カメラマンであった。

昭和八年に三原山の噴火口から飛び込んで自殺する人が相次ぎ、これが話題になった。そのため、読売新聞と日活が、大学教授らと共同で噴火口をフィルムに収めようとした。

この時、日活のカメラマンであった樋口氏のフィルムを見た正力松太郎読売新聞社長が、樋口氏を自分のところの映画部に欲しいと言い、樋口氏は昭和十年に読売新聞に移ることになった。

昭和十二年七月七日に蘆溝橋事件が勃発し、急遽、樋口氏は三人の記者と北京に行くことになった。七月十一日の夜、真柄写真部長らと共に東京駅を発った。

蘆溝橋事件は一時解決するかにみえたが、結局本格的な戦いになっていった。樋口氏が蘆溝橋で撮ったフィルムは早くも七月十七日、ニュース特報として封切りになった。

日本軍は北京に入城、戦線は拡大していった。樋口氏も軍を追った。保定に向う途中の九月十六日、拒馬河渡河戦に樋口氏はアイモを持って裸でとび込んだ。この時の撮影の模様は「カメラマンも決死の渡河」と当時の新聞・雑誌に紹介され賑わした。

十月二十九日、太原攻略の従軍中には左手に砲弾の破片があたって負傷した。当時、樋口氏は三十八歳であったが、相当勇敢な従軍カメラマンだったようだ。

そのあと上海に向った。

——南京にはどの部隊についていったのですか。

「どの部隊と決まっていた訳ではありません。上海を出てから最初蘇州に行き、南京には中山陵を通って中山門から入りました」

——入城したのは何日ですか。

「陥落直後だと思えます。中山門のまわりは城壁で、その前には堀があります。ですから中山門を砲撃してここから入ろうとしたのですが、これがなかなか大変でした。それも道理で、中山門から入った時、内側には土や土囊がうず高く積み上げられていました」

——城内ではどこに宿泊しましたか。

「中山路から中山北路に左折するところが坂になっていて、左折した左側の民家に釜原支局員と二人で入り、ここを臨時支局にしました。

中国の子供をシヨウハイと言っていました。が、われわれはシヨウハイを雇って、三人でやってみました。雇うといつても食事をやって、雑用があれば頼むといったものです。シヨウハイも一人で食えないから喜んでいました」

——城内の様子はどうでした？

「臨時支局からさらに中山北路を行くと、通りの左側に連隊本部がありましてね、その連隊本部の裏庭に、中国軍の銃や拳銃が一メートル以上山になっており、兵隊が、好きな拳銃を持っていけ、と言っていました。私は取材だからそんなものをもらってもしょうがないので断りました」

——どの位ありました？

「何百丁か、何千丁か。そばに法幣といって中国の紙幣もいっぱいありました」

——法幣は使わなかったのですか。

「使えなかったと思います。そのままにしましたから。あとで法幣は焼いたと思います」

——城内はどこに行っていましたか。

「自動車を持っていたので毎日あっちこちに行きました。軍官学校に行った時、軍官学校の中に日本の名刺の四、五倍ほどある蒋介石の名刺がありました」

——入城式はどこで撮りましたか。

「中山東路をはさんで軍官学校の反対の方から軍司令官を撮っています。入城式の頃は中山門もきれいになっていました」

——撮ったフィルムなどは自分たちで上海へ持っていくのですか。

「いや。連絡員が上海から来ていて、これに持っていつてもらいました」

——南京城内で一番印象的なことは何ですか。

「さきほど言ったように、連隊本部にたくさん銃や拳銃があったことです」

——その頃、日本軍による虐殺があったと言われていますが……。

「どこで何があったのか知りません」

——見たり聞いたりしてませんか。

「全然わかりません。だいたいそういう形跡を見たことはありません。あったとよく言われていますが、どこでどんなものがあつたのか。中山廟など荒されていないし、きれいでした。やらなきやこつちがやられるからやつたのを虐殺と言ってるのだと思います」

——いつまで南京にいましたか。

「入城してから一カ月くらいいたと思います。入城式のあとは暇だったのでブラブラ遊ん

でいました。中央のロータリーを中華門の方に行くと、この通りの左側を夫子廟といって、花柳界がありました。秦淮河が流れていたので、秦淮とも言っていました。当時の日本の吉原のようなところで、女と遊ぶこともでき、酒も飲ませてくれました。夜になると釜原と一緒によく行きました」

— そういった店はどの位あったのですか。

「その辺一角にはずいぶんありました。そこにいる女をチャンシークニヤンと言っていました。そこに行った時は泊りますから、一晚中店の前に社旗を掲げた車を止めて有名になったこともあります」

— 兵隊も来てましたか。

「兵隊は来てません。禁止されていたと思います。日本人は記者関係の人ばかりでした」

— 記者以外の日本人は？

「日本人はまだ南京に来てませんでした」

— 兵隊は慰安所などに行ってたのでしょうか。

「さあ、慰安所があったのかどうか知りません」

— 南京の後はどちらへ？

「上海に戻って東京に帰りました。ですからその直後の徐州作戦には従軍してません」

— 以上が樋口氏の証言である。

樋口氏は明治三十二年一月生れで、お会いした時は八十七歳であった。齒を五本抜いた

ばかりとおっしゃっていたが、齒医者に通う以外どこも悪いところはないという健康な人である。話し方も足どりもしっかりしている。

樋口氏は、会う前から、南京では虐殺がなかったし、話すようなことはない、と言われていたが、お会いして話をうかがうとその通りであった。それでも、『読売新聞百年史』などを参考に、できるかぎりのことを思い出して話して下さった。

樋口氏はいったん帰国したあと、再び漢口作戦から従軍した。昭和十五年には、日本ニュース映画社に移り、大東亜戦争後は、交換船に乗ってアフリカのローレンスマルケスまで行き、その後、香港支局長、満州総局長をつとめた。

敗戦と共に日本ニュース映画社をやめ、仲間と一緒に仕事をやったりした後、やはりカメラを、というのでGHQに入った。ここでカメラをまわし、GHQの解散後は、読売新聞社系列の広告代理店に入って定年まで勤めている。

読売新聞・森博カメラマンの証言

森博氏は、支那事変の初頭、片翼で飛行した海軍機を撮影したカメラマンとして知られている。

南京陥落直前の十二月九日、上海の公大基地^{くんだ}に、片翼の半分を失いながら飛行してくる九六式艦戦が現われた。この日、第十三航空隊は南昌爆撃に向い、この時、樫村三空曹の

九六式艦戦は南昌上空で中国機と衝突して片翼の半分を失った。それでもこの片翼の飛行機はどうか上海に帰ってきた。公大飛行場にいた森カメラマンはそれを見ると、海軍参謀の制止も聞かずアイモを廻した。結局、この時のフィルムは、海軍省から許可が出て、ニュース映画として公開され、当時の日本を沸かせた。フィルムから新聞用写真もつくられ読売のスクープになった。この時の写真は靖国神社に飾られ、また当時海軍次官であった山本五十六中将は次官室に長い間飾っていた。

森氏が南京に向うのはこの特ダネ直後である。

森氏は明治四十四年生れ。読売新聞に入社して一年たった昭和十二年八月上旬、突然、海軍担当を命ぜられ、上海に渡った。数日後、上海では陸戦隊と中国軍が衝突し、森氏は第二次上海事変を劈頭から取材することになった。二十六歳の時である。

——杭州湾から戻って、南京に向うのですか。

「杭州湾から戻った時、上海が平靜になり、しばらくして陸軍が南京に向いましたので、私も行き、無錫の占領を撮りました。

この時、読売の渡辺（峰雄）記者と朝日の前田（恒）カメラマンが死んでいますが、渡辺記者はもともと上海にいた人で臨時雇いだったのですが、勇敢な人でした。前田カメラマンは、われわれと別れて一時間ほどした時、死んだと聞かされたので、その時は驚きました。カメラマンとしてはじめての犠牲者だったはずですよ。

陸軍と一緒に無錫までは行きましたが、その頃はまだ南京攻略が決まっていなかったので、そのあと私はいったん上海に戻りました。

読売新聞では、三カ月位戦場にいると、一度東京に戻ることになっていまして、私も上海に渡って三カ月になりましたので、それから東京に戻りました。その頃、朝日新聞や都新聞の記者は一日十五円の従軍手当がつき、毎日新聞は十三円の手当がついてました。読売は一元もつきませんでした。その代り、本社に戻ると、正力（松太郎）社長が一人ひとりに会って、五百円をくれる決まりになっていました。給料が六十円位の時のことです。正力社長は、戻った時に会うだけでなく、出発の時も必ず東京駅まで見送りに来てくれましたから、皆やる気になっていったと思います。

この時、私はすぐに上海に戻り、それから南京で入城式があるというので自動車で行きました。入城式が十七日でしたから、十五日か十六日頃、南京に行ったと思います」

——いつまで南京にいましたか。

「入城式はたぶん大島（源次郎）カメラマンが撮ったと思います。私は翌日の慰霊祭を撮りました。ですから、十九日頃まで南京にいたはずですよ」

——南京の様子はどうでした？

「特別のことはありませんでした。南京にはその時だけでなく、その後も何度か行っており、翌年の一月頃は、南京が平和になったというので、それを撮るために行ってます。

入城式の頃は、一月頃に比べると、街には中国人も相当いましたが、日本兵が中心でし

た。二度目に行った時は鉄道で行きましたが、その時は日本兵も一部だけになり、三度目に行った時は日本人が相当来ており、福田屋という日本の旅館もありました」

―入城式の頃、中国の市民たちは日本兵を恐れていましたか。

「住民は敵意を持っていませんでしたし、日本兵を恐がっていませんでした。逆に、便衣隊がいましたので日本兵の方が中国人を警戒していました」

―日本兵による中国兵に対する殺戮があったと言われていますが……。

「ありました」

―ご覧になったのですか。

「見てませんが、兵隊から聞きました」

―どんなことですか。

「捕虜を揚子江の淵に連れて行って、どこかに行けと行って放したが、結局、殺したということです。岸が死体でいっぱいだったとも聞きました。それは本当だと思います。市民に対しては何もありませんが、中国兵に対してのそういうことはありました」

―南京にいて聞いたのですか。

「ええ、南京にいる時です。何力所かで聞きました」

―なぜやったのでしょうか。

「捕虜を捕えたが、捕虜にやる食糧がないし、収容する所がない、放してもまた兵隊になる、それで困ってやったと言っていました。中国の兵隊は日本と違って、食えないから愛国

心がなくとも兵隊になります。事実、放すと、すぐどこかで兵隊になってます。

また、中国には便衣隊がいて、日本兵はこれを恐れていましたから、やってしまおうという事になったのだと思います」

―どの位の捕虜をやったのですか。

「相当多数だ、と聞きました」

―上の命令でやったのですか。

「下士官が単独でやったのだと思います。分隊長クラスの下士官です。もしかすると、もう少し上の方も知っていたのかも知れません。

その頃、捕虜を扱う国際法が何かあったと思いますが、兵隊は捕虜をどう扱うのか知らなかったし、自分たちは捕虜になったら死ぬものだと思っていたので、捕虜は殺すものと思っていたのです。」

陸軍の下士官の中には何年も軍隊にいて、軍隊のことは何もかも知っていて、新任の少尉が小隊長で来ても、上官とも思わず馬鹿にしている悪い奴がいました。彼らが新しく入ってきた兵隊を殴っていじめていたのですが、そういった下士官がやったのだと思います。私も何年かして、前線を進撃しながら、捕えた中国兵を斬っているところに出くわし、下士官から斬ってみないか、と言われたことがあります。戦争ですから、殺す、殺されるのは当然ですが、やらなくともいいことまでやったと思います」

―下士官全体がそうだったのですか。

「いや、一部の下士官です。陸軍は国民全部が兵隊になりますから、一般社会では使いのにならない悪い奴も入ってきて、これらが陸軍を悪くしていました。そういう奴がああいうことをしたのだと思います。私はカメラマンとして従軍していましたから、一度も軍隊に入らずに済みましたが、そういうのを見ていましたから、いつも軍隊には入りたくないと思っていました。」

軍といっても、海軍は陸軍とちがってスマートでしたから、私は好きでした。海軍の報道担当をしていた重村（実大尉）さんは、よく共同租界のダンス・ホールにも行ってました。陸軍の将校は、ダンス・ホールに行っても日本刀を振りまわしたり、剣舞をやったりしていました。陸軍と海軍はその位違っていました」

——下士官は残虐なことをやっているという気持はなかったのでしょうか。

「日本兵は捕虜をやっても悪いことをやっているとは思ってなかったと思います。私もその頃は日本が戦争に敗けるなどとは思っていませんし、敗ける時は死ぬ時だと思っていました。戦争は勝つか、そうでなければ死ぬものだと思っていたわけです。兵隊もそうだったと思います。ですから、兵隊は捕虜をやったことを隠してませんし、悪いと思ってなかったし、自分が生きるため仕方なかったと思います」

——虐殺に関して、直接、何かを見ましたか。

「話だけで、実際は何も見えてません。南京では見てませんが、その後の作戦で、攻撃の途中、日本兵が民家に入って、床をはがして飯盒の焚きつけにしているのは見たことがあります」

ます。また、出発する時、家をわざわざ壊したり、中には放火をしているのを見たことがあります。その時、兵隊に聞いたところ、敗残兵が入ってくるからだ、と言ってました」

——略奪もあったと言われていますが……

「南京ではどうだったかわかりませんが、略奪といいますが、そういうことは兵隊だけでなく記者もやっていました。作戦が始まる時、連隊本部からは従軍記者も何日か分の食糧をもらいます。しかし、重いですから二、三日分の食糧しか持たずに従軍して、なくなれば後は民家に入って探します。食糧をとるのは悪いとは思ってませんでしたから、そういうことは兵隊も記者もやっていました。」

記者の中には食糧以外のものを略奪する人もいて、上海の博物館から勝手に持っていった記者もいたといいます。もともとそこにあるのはイミテーションで、本物は重慶にあつたと言いますが」

——南京で虐殺をやったというのはどの部隊ですか。

「さあ、どこでしょうか。わかりません。第六師団のように強い部隊ですと、中国軍もそれを知っていて、戦う前から逃げていたようです。私は鹿児島生まれですから、その後の漢口作戦などは第六師団についていきましたが、第六師団が通ったあとに、中国兵がまだいましたから、その後統部隊がやるということはあると思います」

——その時、南京での事件をほかの記者も知っていましたか。

「よく仲間とはお茶を飲みに行ったりしましたが、話題にはしてませんでした。しかし、

知っていたと思います」

「なぜ誰も話題にしなかったのですか。」

「戦争だから殺しても当然だと思っていたし、戦場ですから死体を見ても気にしていませんでした。ですから話題にしなかったのだと思います。そういうことで記者は突っ込んで取材しようとはしませんでしたし、われわれも軍から、中国兵も日本兵も死体を撮ってはだめだ、と言われていましたから撮りませんでした。死体のことを書いても撮っても仕事にならなかったからだと思います。」

日本軍の悪いことばかりを話しましたが、もちろんいい話もたくさんあります」

——東京裁判で南京事件が取り上げられています、その時、南京事件を知った人はどの位いましたか。

「誰も知らなかったと思います。東京裁判の時の記憶がはっきりしませんが、たぶん、田中隆吉（少将）のような人が告発したからだと思います。ただ私は南京で話を聞いてましたから、あのことがかと思いましたが」

以上が森氏の証言である。

森氏は、大東亜戦争が始まるまで上海にいたため、様々な作戦の思い出が一緒になっていたらしく、日時なども必ずしも正確ではなかった。しかし、インタビューの時は、わざわざ当時のアルバムを持ってきて話をしてくれ、また、私には疑問に思えるところがあった、その後何度もおたずねしたが、いつも丁寧に答えて下さった。

南京から戻った森氏はそのまま上海に残り、上海を拠点にニュース映画の撮影を続けた。漢口作戦、宜昌作戦などに従軍し、あるいは復興する上海、平和の甦える南京、などといったものを撮り続けた。

昭和十五年になって、同盟、朝日、毎日、読売のニュース映画部門が統合され、日本ニュース映画社になった時、森氏も当然のように移った。上海にいたまま読売新聞の社員から日本ニュース映画社の社員になったのである。その時、同じ上海で同盟から日本ニュース映画社に移ったのが浅井達三氏である。

昭和二十一年、GHQが東京裁判をフィルムに収める時、アメリカのカメラマンが日本人の被告を知らないというので、森氏がGHQに入り、撮影にあたることになった。そのため、市ヶ谷の法廷では、GHQを代表して森氏が、日本ニュース映画社を代表して浅井氏がフィルムを廻すことになった。

森氏は、東京裁判を撮った後、NHKに移り、定年まで勤めた。記念すべき樫村三空曹のフィルムは、現在NHKが持っている。

四、同盟通信

同盟通信・新井正義記者の証言

新井正義氏に、南京の話聞かせてほしいと申込むと、さっそく返事が来た。昭和五十九年の秋であった。

「南京従軍日誌を持っていたが、戦災で焼失したのでありません。うる覚え程度のことなら、お話はできるでしょう」

新井氏は押し出しがよく、同僚の前田雄二氏の回想録によれば、「新井を剛のタイプとすれば堀川は学究肌」とある。堀川というのは、同じ同盟通信の従軍記者である。簡単な評だが的を射ていると思った。

当時、新井氏は同盟通信の政治部におり、三十二歳であった。取材のため東京から上海に派遣されたのである。

新井氏は、戦後、昭和二十年十一月に同盟が共同通信と時事通信に分れた時、共同通信の政治部長になっている。昭和三十三年に常務理事になり、共同通信をやめる昭和三十九年までそのポストにとどまった。

私の訪問の趣旨は電話でも確認されていたので、部屋の椅子をすすめると、歯切れの良い口調で一方向的に話しはじめた。開口一番、南京虐殺の話になった。

「われわれが南京にいた時、大虐殺なんて聞いたこともなかった。何年前か、上海の社長をやっていた松本（重治）が回顧録を書くことになったが、松本は上海にいたから南京のことは何も知らない、そこで南京で取材をやっていた深沢（幹蔵）と前田（雄二）、そして僕が呼ばれた。一緒に飯を食いながら、当時の事を話してくれ、という訳だ。その時、前田は見たと言っていたが、僕は虐殺とかそういう現場を見たことがないんだ。

死体は見た。兵士の死体だ。便衣の者もいた。その中に捕虜の死体もあっただろう。南京の全域をカバーした訳じゃないが、全部で三、四万の死体があったのじゃないかな。大部分は戦場で死んだものなのだが、その中にそういうものがあつたのかもしれない。飯を食いながらそういう話をした。

従軍記者といっても、まともに扱われるのは徐州作戦あたりからで、あの頃はすべて前でね。食事やらロバやら自分で用意する。本心にひどいものだった。

あの時はどの部隊が南京一番乗りするか、それを誰が記事として送るか、それが競争で、だから、危険でも最前線まで行った。広島大学にいった堀川（武夫）と、この前死んだ前田と三人でチームを作っていたのも一緒だった。一人が軍の本部にいて二人が最前線に行く。交代でこの組合せをした。最前線には上海で雇った若い中国人を伝令として連れていった。何かあるとこの中国人を本部にやらせる。本部には無電があり、これで上海に記事

を送るのだ。この無電というのが重くてね。一人じゃ持てない。ロバにのせて運んだ。

私は閩北の戦いが終わったあと、東京から上海に行き、待機していた。その時は、柳川兵团に続け、と言われていた。蘇州あたりで柳川兵团に追いついた。柳川兵团は杭州湾上陸以来、特別大きい戦闘もなくすんなり南京まで行った。彼らが何かやったとは思えない。上海で戦っていた師団があとから追いついてきた。彼らは、仲間が半分近くもやられた連中もいたから、気が立っていた。やったとすれば彼らだろう。

柳川平助中将軍司令官から、南京の首都防衛軍が二十万から二十五万くらいだろう、という話を聞いたことはある。柳川軍は五万、日本軍は合計で十万ぐらいということだ。

すんなり南京に行ったといっても、敵がない訳でなく、蘇州の先では朝日の記者がやられてる。私らは線路にそって南京に向ったが、柳川兵团は太湖のほうを廻っていった。線路上を北上していくのだが、線路そばの稲の列が線路と直角になると、兵が隠れているのが見える。そうすると突然射ち合いになる。そうやってどんどん進んだ。

途中でよく中国人に会った。中には日本兵が「この中国人を使役した」と書いたものを腕につけているのもいた。これを見せるんだな。便衣隊に間違われるので身の危険を感じてこうしたのだろう。

紫金山あたりから本格的な戦闘になった。紫金山から城壁までの間、相当射ち合いがあった。十二月十三日に私たちは中山門から南京城内に入った。入ってから同盟の宿を探した。どの家も戸が閉まっている。結局、中山門から少し入ったところに設営した。南京城内

に残っていた人たちは、見てわかるが、貧民だけだった。

南京城内に入ったといっても城外にはまだまだ敗残兵がたくさんいて、戦闘が終わったという感じではなかった。乱戦が続いて危なかった。計算からいくと、敗残兵は十六万位いたのだろう。十三日か十四日だと思うが、郊外にあった軍司令部で宮様がやられた、と聞いてあわてて取材に行った。車で四十分ぐらいかかったと思う。宮様に会うと、『ゆうべえらい目にありました』とおっしゃっていた。そういう状況だった。

十五日に旧支局に入った。旧支局は街の中で、すぐそばに金陵女子大学があった。旧支局に入ってから、女子大学の校長が寮長が来て、婦女子の難民を収容しているが日本兵が暴行する、同盟さんに言えばなんとかなると思ってきました、と言う。そこでわれわれは軍司令部にそのことを伝えに行った。

私自身は虐殺の現場や死体を見たことがない。下関では中国兵が揚子江を渡る時、射合いがあったと思う。下関で、堀川か誰かが、兵隊の射殺現場か死体かを見たと言った。十六日に軍官学校で処刑を見たと同田が書いているが、それは軍政部じゃないのか。どっちにしろ私は見ていない。すぐにいろいろな軍が入ってきたから、相互に牽制して暴力はやれなかったのじゃないかな。捕虜もいたが、日本の兵隊が捕虜の持っている缶に米を入れてあげるのを見たこともある。入城式直後には小物も売っていたし、兵隊が甘いものに飢えていたから甘味料もよく売っていた。こういう状況だから虐殺というのはどうかな。全然なかったとは言えないが、二十万とか、そういうのは全然ありえない。どのくらいか、

見ていないから言えない。

入城式の時、何か起こるかもしれないというので、道路脇に並んでいる兵隊の後から、前田と一緒に松井（石根）大將を追いかけた。万一を考えてそうした。だからすっかり安全だったという訳ではなかった。私は入城式のあとまで南京にいて、海軍の軍艦で上海に戻った。南京にいたのは約一週間だった。

虐殺というのは戦後、東京裁判ではじめて聞いた」

このような話であった。新井氏はメモとか資料とか一切見ず、ただ自分の記憶にあることと、覚えていることを一方的に話してくれた。ほとんど聞き糺^{ただ}すことなく、そのまま記録したものが以上である。

同盟通信映画部・浅井達三カメラマンの証言

昭和十二年七月、蘆溝橋事件が起きた時、浅井達三氏はメトロトーン・ニュース日本支局のニュースカメラマンであった。八月十三日に北支事変は上海に飛び火し、海軍陸戦隊と中国軍が激突した。同盟通信では上海支社の写真部がフィルムを廻していたが、本格化する戦線のため急遽、浅井氏を入社させ、上海に派遣することにした。八月下旬のことである。

上海に渡った浅井氏はすぐに第一線に行くが、その華々しい活躍は、『ニュースカメラの

見た激動の昭和』（日本放送出版協会）に紹介されている。浅井氏は、以降八年間にわたる従軍生活することになるが、最初に最もきびしい体験をした訳である。その時、二十四歳の若さで、同盟通信では浅井氏より若い人は一人だけだった。

大東亜戦争が始まるまでの四年間、浅井氏は、上海はじめ南京・徐州・漢口など中国各地の戦いをニュース・フィルムに収めた。しかし、ほとんど中国にいたので、自分の撮った「同盟ニュース」を見ることはめったになかった。

昭和十五年、各社のニュース映画が解散して日本ニュース映画社が作られ、ここに移る。戦後は一転して、東京裁判を撮ることになり、日本ニュース映画社の代表として三年間、市ヶ谷台に通い続けた。その後、再びメトロに戻った後、映画製作会社に入り、中国協賛の「友誼の門」などを撮った。復交前から中国各地には度々行って、戦後も中国とは縁のある人である。

この証言は、昭和六十年十月二十一日、慶応大学が久しぶりに六大学野球で優勝した翌日、大学の正門前にある浅井氏の事務所でお聞きしたものである。

——浅井さんは上海だけでなく、十一月五日の第十軍の杭州湾上陸作戦にも従軍していますね。

「そうです。上海での戦いを撮ってましたが、陸軍から話があったので、上海から船に乗り、上陸作戦を撮りに行きました。フィルムに収めると、一個小隊をつけてもらい上海ま

でフィルムを持っていきました。周りは中国兵がいて、とても一人じゃ歩いていきませんからね」

—それから南京に向うのですか。

「しばらく上海にいて、十二月に入ってから荒木（秀三郎カメラマン）と向ったと思います。

同盟のことは前田雄二さんが書いた『戦争の流れの中に』（善本社）にあるとおりです。彼は毎日、夜に日記をつけてました。それを基にあの本を書いたので、正確だし、僕らが忘れている人の名前まできちんと出てきます。当時軍に対して言えなかったことも書いてるし、同盟通信の中の争いも隠さずそのまま書いてます。全くあの通りです」

—どの師団についていったのですか。

「どの師団という決まりがなかったので、あっちこっちの部隊について、とにかく先頭を行きました。

兵隊さんにはよく、『新聞屋さん煙草ない？』と言われましてね。当時はルビークインでした。逆に『豚の足をやるよ』とももらったこともありました。徴発したものでしょうが、われわれにとつては久しぶりの肉でした。われわれも飯盒炊さんで、寝る時はわらを敷いて服を着たまま寝たものです。わらは意外と暖いんですよ。

南京に行く途中、銀行があり、金庫を爆破したら中国の紙幣がどっさり出てきたというので、それで飯盒炊さんした兵隊もいました」

—中国紙幣を焚きつけにするというのは作り話かと思いましたが、本当なんですね。

「本当です。金庫を爆破したというのは見てませんが、焚きつけにするのは見ました。租界に持っていけば通用するのにな。常州だったと思います」

—どういうコースを行いましたか。

「無錫、常州を通って、それから鎮江に行きました。

鎮江で祓川（親茂カメラマン）と一緒にいた時、向うから中国人がてんびんに荷物をかついでやってきまして、われわれを見ると、あわてて荷物を置いて逃げるのですよ。そこで荷物を見ると手榴弾がいっぱいありました。従軍記者も常に危険でした。鎮江から紫金山の方に行つて、その時、牧島が怪我をしたので毎日新聞の車に乗せてます」

—南京には何日に入つたのですか。

「十三日です。中山門から入りました」

—城内の様子はどうでした？

「中山通を揚子江の方に行く途中に難民区があつて、日本人は入れないようになっていたようです。入ろうと思つても中国人がたくさんいるから危険で入れませんがね。そこは、紅卍字会の人たちが世話をしていました。中国人は主に難民区にいて、難民区以外の自分の家にいる人は表に出てこないようでした」

—紅卍字会の人ほどの位いましたか。

「さあ、どの位だったのか。印象に残ってる位ですから相当いたと思います。

難民区で紅卍字会の人たちが日本の兵隊の前に立ち塞がり、この人たちは兵隊ではない

と一生懸命説明していたことがありました。

また、城内に入って二、三日してから城内のあちこちが燃えていました」

——日本兵がやったのですか。

「日本兵なのか中国兵なのかはつきりしません」

——中国人は日本軍をどう見ていたのでしょうか？

「恐がっていたと思いますよ。それは戦後アメリカ軍が上陸した時、日本人が恐がったのと同じです」

——虐殺があったと言われていますが……。

「私は見てませんが、あったという話です。そんな話を聞きました」

——やってるのを誰か見たのでしょうか。

「少数の記者が死体を見たと言っていました。東宝の白井茂（文化映画部カメラマン）さんなんかはわれわれとちがつて、南京の真ん中に宿舎があったので、いろいろ見たでしょう。『カメラと人生』に書いてます」

——死体はどんなところにあったのですか。

「揚子江と雨花台にあったと言っていました」

——戦死体ではありませんか。

「さあ、やったと聞きましたが……。どのように片づけたのか、入城式までには片づけたと言っていました」

——人数はお聞きになってますか。

「どのくらいかわかりません」

——浅井さん自身をご覧になったことは？

「中国人が城内を列になってぞろぞろ引かれていくのは見ています。その姿が眼に焼きついています。その中には軍服を脱ぎ捨て、便衣に着がえている者や、難民となって南京にのがれてきた農民もいたと思います。手首が黒く日に焼けていたのは敗残兵として引っぱられていったと思います」

——それはいつ頃ですか。

「昼でした。二百人か三百人の列で、その列が二つか三つあったようです」

——捕虜の連行とか城内の様子は撮らなかったのですか。

「陥落や城内に入った直後はいろいろ撮りましたが、一段落してからは撮りませんでした。撮っても仕事になりませんから。その他、私が撮ったのは入城式の模様で、松井（石根）大將が中山門を通っていくのを中山門上で後から撮って、それを収めてから中山門を駆け下りて、前からも撮りました」

——虐殺の現場はどの社も撮ってませんか。

「誰も撮ってないでしょう。記録はないと思います。私は死体は撮りたくなかったから、現場を見ても撮らなかつたでしょう。ずっと戦場にいましたが、戦闘は撮っても死体は撮ったことはありません。それからやらせを一度もやったことはありません。南京でも占領

して万歳している写真というのはやらせです。占領した瞬間というのは戦闘の続きですから万歳どころじゃないですよ。そんなところにはカメラマンもめったに行きませんしね。万歳できるのは占領してから半日もしてからでしょう。ただし、占領した嬉しい気持を表わすため、万歳してもらって写真に撮るのは、やらせでもよいと思います。気持が行動に出てますからね」

——同盟通信のなかで、虐殺ということが話題にならなかったのですか。

「なりませんでした。その頃、敗残兵や便衣隊がよくいて、それをやるのが戦争だと思っ
ていましたから……」

——外国のジャーナリストが数人、南京に残ったといわれていますが……。

「さあ、会ったことはありません。ただ、パネー号が沈んだので、それに乗っていた記者たちが南京に入ってきました。十四日だと思います。四人ですね。上海に行きたいと同盟通信に來ました。同じ記者ですから同盟に來たと思います。車で上海に行くという話がありました。途中、中国兵がいて危ないので海軍と話をして、海軍の船に乗っていきました。パネー号の沈没を撮ったフィルムは水にぬれたが映っていた、とあとで聞きました」

——外国の記者は虐殺を見えますか。

「その頃、話は起きてませんでしたから、見てないでしょう」

——パラマウントのニュース・カメラマンのアーサー・メンケンが残って南京陥落を撮った、と言われてますが……。

「メンケンなら私も知ってますよ。上海で一緒でしたから。彼もそれまで上海で撮っていました。でも南京では会わなかったな。一月頃上海に戻ってからも、よくメンケンとは昼飯を一緒に食べました。フランス租界のジミーというところに行くといつもいてね。一緒に撮った写真もあります」

——アーサー・メンケンから虐殺の話は聞いてませんか。

「聞いてません」

——南京には何日位いましたか。

「入城式を撮ったのは確かですが、それで上海に戻ったのか、その後も数日はいたのかはつきりしません。上海に戻ってから杭州攻撃があつたので、すぐ杭州に向いました。昭和十三年になって上海に戻った時、石川達三に会ってます。彼とは名前が同じで、同盟通信には村上達というのがいたので、三達さんたつといって三人で飲みましたよ。石川達三は中国のことを「生きてゐる兵隊」に書いています。また、前田雄二さんの『戦争の流れの中に』にも一文を寄せてますが、書いてる通りだと思います」

——浅井さんはそのまま上海にいたのですか。

「二月に、上海から凱旋する松井大将と一緒に東京に帰りました。上海を出る時は畑（後六 大将も宮様（朝香宮）も見送りに来てました。下関から東京行きの富士というのがあって、赤い絨緞が敷いてある列車ですよ。確か二輦特別連結したと思います。この車輛に松井大将と副官と馬淵（逸雄中佐）さんと私と、全部で六、七人いたと思います。途中から

軍の参謀が乗り込んできましたけど。

途中、戦塵を流すというので、たぶん熱海だったと思いますが、そこに一泊しました。次の日は天皇陛下に会いますからね。私も同じ旅館に泊りました。翌日東京駅に着きましたが、東京駅には軍のお偉方がほとんど迎えに来てました。

松井大將が降りるのを撮影しようと、列車から一番に降りたら憲兵に怒鳴られて、それでもこっちは報道部だと言って撮り続けました」

——松井大將はどんな方ですか。

「とてもとても、話す間柄ではありません。私は隣の車輛にいましたし。それでも上海では時に記者会見の場で顔だけは会わせていました」

——戦後、東京裁判を撮る訳ですが、松井大將は死刑になりますね。

「私は日本を代表して最初から東京裁判を撮ってました。南京のことが起訴状にあった時、それは当然だと思いましたよ。ある程度はありましたからね。また、ピラミッドの頂点だった松井大將は仕方ないと思います。ただ、二十万人もの虐殺と言ってますが、数の面ではそうは思いません。南京の人口の大半がいなくなる数ですから」

以上が浅井氏の証言である。

同盟通信・細波孝無電技師の証言

細波氏は明治三十八年十一月生れ。昭和四年に電通に入り、電通時代は満州事変に従軍している。昭和十一年に電通は連合と合併して同盟通信社になった。

翌十二年七月、北支事変が起こり、戦火は八月になって上海に飛び火した。当初、同盟通信は上海支社だけで取材報道を行っていたが、戦線の拡大と共に東京から記者・無電技師・カメラマンの派遣を受けるようになった。

十月になり、細波氏が上海支社に派遣された。無電設営のため、記者よりも一足先に上海に渡った。三十一歳の時である。

太湖から無錫に進み、しばらくここを拠点とした。前田雄二記者たちが書いた南京攻略の原稿を打電した。海軍の飛行隊は常州を基地にしており、松尾鉄夫記者が海軍の情報を持ってきた。これも打電した。この頃は細波氏の無電が、同盟通信の前線基地となった訳である。もちろん従軍記者の中では一番後方に位置していた。

——南京城にはどういうコースを歩きました？

「湯山を通って中山門から入りました。

湯山の近くでは相当の捕虜が竹囲いの中にいたのが印象的です」

——どの位の捕虜ですか。

「数えた訳でないのですが、よくわかりませんが、一万人近くいたと思います。南京へ行く通りからは見えませんが、ちよつと入ったところに竹囲いがあり、そこにいました。その時は

偶然見たのだと思います」

——何日のことですか。

「湯山を通ったのは南京が陥落した翌日ですから、十二月十四日です。野原というか、林の繁ったところで、ゴルフ場のようなところです。中国兵はおかゆのようなものを食べていました。その後、私たちは城内の同盟の前線宿舎まで行きました」

——同盟の宿舎では記者同士が喧嘩して大変だったそうですね、東京と大阪の記者にわかれたりして。

「樋口憲吉という柔道の猛者がいましてね。酒は飲む、喧嘩は好きという人です。その他にもそういう猛者がいて大変でした。私は酒は飲まないので冷静に見ていました。

従軍中にはいろんな人がいまして、徴発品を集めている人もいました。南京には考古館がありますし、杭州は寺の都といわれて古いものがたくさんありました。誰もいないから勝手に持ち出す人がいたようです」

——入城式はどこでご覧になりました？

「松井（石根）大將は中山門から入って、会場に行きましたが、私はその会場の近くにいました。国民政府の建物だったと思います。ここでカメラマンの稲津（己喜）が撮っていました」

——南京では虐殺があったと言われていますが、ご覧になっていますか。

「言っていますか」

——ぜひ。

「虐殺なのかどうか。誰にも言ったことがないのです。揚子江のところに下関（シャカウ）という広い場所があつてね」

——南京の船着き場ですね？

「そうです。城門を出た河川敷の土手のところです。ここには塹壕やトーチカがありました。揚子江に向つてますが、中には逆に南京に向いてるトーチカもありました。コンクリート製で、真四角の水車小屋のようなものです。中国では守りのため、重要などころにはこういうのが一つ二つはありました。

中国軍はここで戦おうとしたんですが、結局ここから逃げてしまいました。蒋介石なども下関から逃げたようです。私が下関に行った時、ここでやったらしく、まだ家具などが燃えていました」

——やっているのを見たのですか。

「いや、やったすぐ後のことだと思います。やっていると見せないでしようからね。トーチカに捕虜をつめ込んで焼き殺したと思います。トーチカの銃眼から苦しそうに息をしてこちらを見ている中国兵がいたことが、今も印象に残っています。苦しそうに鼻をふんふんいわせてね」

——トーチカには何人位いました？

「二、三十人は入るんじゃないかな。家具などが詰めてありました。そういうのが三つか

四つありました。たぶん、焼いたと思います。銃弾はもったいないので、家具にガソリンをかけて焼いたと思いますよ。トーチカの中だけでなく、揚子江岸にも死体がありました。中には針金で縛って繋いでたのもありました」

——死体の数はどの位ですか。

「さあ、どの位か。百人位でしょうか。湯山にいた捕虜をやったのでしょうか」

——湯山から連れてきてですか。

「たぶんそうだと思います。私が南京に入ってから捕虜が連れていかれるのを見ましたから。あれが湯山の捕虜だと思います」

——南京城内を連れていかれたのですか。

「えーと。そうですね。中山門に通じる通りだったと思います。たしか夜でした。誰かが捕虜の移動だと言うので見に行った記憶があります。八列縦隊で五十メートル位で区切つて、いくつもありました。捕虜はぞろぞろと歩いて、列の前と後に日本兵が何人かついていました」

——湯山にいた捕虜全員が連れていかれたのですか。

「私が見たのは湯山にいた捕虜の何分の一かでした。見たのはそれだけです。何回かに分けて連れていったのではないのでしょうか。一度に連れていったら大変ですから」

——そうすると下関には死体が一人人近くあった訳ですか。

——いいえ」

——一人をやっている途中を見たのですか。

「その時の様子から、私が見たのは終わり頃だと思います。私の想像ですが、揚子江は干満の差が激しいので江岸にあった死体は、中心の激しい流れに巻き込まれ、浮上せずに黄海に流れていったと思います。

あとで二人くらい捕虜をやったと聞いたことがあります。だから下関では場所と時間を考えると一万弱ですが、やったのではないかと思います。

湯山では窪地などもあり、そのような見えないうところでも、何人か捕虜をやったということを知ることがあります。これも見たことではありません。

捕虜が連れていかれるのを見た時はただの移動だと思っていましたが、下関で見た時、そういえばあの時の捕虜は顔が青白く、三途の川を連れていかれるようなものだったな、と思いました」

——下関での正確な日を覚えてますか。

「入城式の前の日か、その日だったような気がします」

——お一人で見たのですか。

「下関までは自動車で行きましたので運転手と、他にも複数の同僚がいました」

——時間は？

「朝早くです。だから夜やったのでしょうか」

——前田雄二氏の著書『戦争の流れの中に』に「深沢（幹蔵）記者が一人で十七日夕方下



南京中央部の中山路と中山北路の西側の一区画で城内に残留した南京市民たち。安全区内のバラックのような家に居住していた。背後にはかつての高級住宅地がある。(昭和12年12月15日)

「特にありませんでした。それは戦争の一面ですから」

——そのほか虐殺とか、そういうことを見てますか。

「同じ頃、上海から支社長の松本（重治）が来ました。松本は、南京市内の大学で何かがあったらしいから行こう、と言います。四人ほどで行きました。松本は国際人だから、上海で何かを聞いてきたのかもしれない。われわれより情報を持ってましたから。結局、学校に行ってみましたが、何もそれらしい形跡はありませんでした。学校にはたくさんの方がいました」

——中国人は一定の区画だけにいたのですか。

「そうです。女だけいるとか、男だけとか、家族がいるところもありました」

関に行き、相当の死体をみた」と書いてますが……。

「そうですね。深沢とは終始一緒に、下関に行った時も一緒だったと記憶していますが。」

下関に行くというので、運転手のほかに僕と深沢、それにもう一人位いたと思います」

——細波さんがご覧になったことは同盟通信の中で話されましたか。

「話題にしませんでした」

——なぜですか。

「その頃は死体といっても免疫になっていましたから」

——死体をご覧になって、いわゆる虐殺されたものと思いましたが。

「私は国際法で捕虜をやってはいかんというのが念頭にありました。それを見て、国際法違反も考えましたが、戦闘の犠牲者だと思いました。入城式前日までに城内の大掃除をやりましたからね。中国兵というのは捕虜というのか敗残兵というのか、そういうのがいて、いつ攻撃してくるかわかりませんからね。」

今、こうやって思い出すと、下関の死体が印象として残っているということです。

その頃は、やらなければこちらがやられますからね。私も深沢も、それぞれ拳銃をずっと持っていました。兵隊だけでなくわれわれもいつどこでやられるかわからない訳です。それまで同僚、仲間に数人も犠牲者が出ていますからね。中国兵にも子供や妻があると思っただけです。自分も子供や妻がありますから。戦争はやるかやられるかです」

——同盟通信の中ではそういうことは噂になりましたか。

中国の兵隊なのか市民なのかわからないのもたくさんいました。入城式が終ると、郊外から来たのか、あるいは隠れていたのか、町に急に中国人がふえてきました」

——日本兵を恐れているようでしたか。

「上海ではそうでしたけど、南京はそういうことはなかったようです。上海といっても、共同租界の中国人は、ほかの外国人と同じように日本人を恐れている訳ではありませんでしたが、郊外の中国人は日本兵を恐れていたようです。もちろんそこは戦場ですから中国人はあまり見えませんでしたけど」

——南京には何日間いました？

「四、五日か、一週間位いました。深沢と帰りました。カメラの高崎（修）も一緒だったと思います。途中、湯山を通りましたが、その時、捕虜はもういませんでした。

無錫を通って、蘇州を見物し、上海に戻ってます。

その後、杭州攻略が行なわれていましたから、一日か二日いて私はすぐに杭州にやらされました。暮になって杭州支局の大星石松に引き継ぎをして上海に戻ってます」

——その頃の南京の様子はどうでした？

「城門などを出入する時は証明書が必要だったようです。部隊ごとに証明書を出していたと思います。なかに、『私はスパイ』と書いた証明書を持っていた中国人もいました。冗談で日本兵が書いて持たせたのでしょうか」

以上が細波氏の証言である。

横浜の保土ヶ谷にあるお宅にうかがったのは、昭和六十年十月であった。細波氏は同盟通信時代の記録を用意して待っていて下さった。八十歳になろうというのにとっても元気でよくお話しになる。話しながら煙草も相当のむ。

細波氏は前田氏の回顧録は読んでおらず、また、巷間、南京大虐殺と言われているものについても、ほとんど知らなかったようである。南京で自分の見たこと、聞いたことを話してくれた訳である。それは、やるか、やられるか、という戦場で自分が体験した印象的な出来事ということである。

細波氏は昭和十三年一月に再び南京に行ってから、そこから徐州会戦に従軍して、東京に戻った。その後もバイヤス湾上陸作戦に従軍している。まもなく大本営詰めにになり、この時は松村（秀逸）報道部長に世話になった。戦後は時事通信に入り、疎開していた佐賀支局にしばらくいて、昭和二十四年に東京に戻った。時事通信社には定年までいた。

一度お目にかかってから、何度か電話でたずねることがあったが、三度目の時、

「不動さんが死にましたよ」

と言う。びっくりした。不動さんとは、同盟通信の写真部長であった不動健治氏である。戦後、当時の写真などを発表もしている。細波さんから、不動さんも南京に行っている、まだ元気らしいのでお会いになったら、と言われていた。さっそく連絡してみます、と言ったばかりである。

電話を切ってから新聞を見ると、訃報が載っていた。